

宮川康子著

『富永仲基と懷徳堂——思想史の前哨』

(ベリカン社・一九九八年)

表 智 之

副題にいう「思想史の前哨」とは、富永仲基のことである。とはいっても、仲基その人の思想的内実を評価する言辭として「前哨」というのではない。内藤湖南が仲基を顕彰してよりこのかた、仲基が「天折の天才」として近世思想史上に特異な位置を与えられてきたまさにそのことに関わって、著者は仲基に「思想史の前哨」を見るのである。

富永仲基は、延享三年（一七四六）、三十二才にして夭折した。まとまった著書として残されたのは、『出定後語』と『翁の文』などわずかに数編。短い生涯ではありながら、その伝記的事項はさほどつまびらかには知られていない。一人の思想家として取り上げ、その思想的内実を記述するには、あまりに史料制約の大きい対象ではある。しかしながらその制約の大きさと裏腹に——裏を返せば、その制約の大きさにこそ——近世思想史上に仲基が与えられた位置は、決して小さくはない。内藤湖南以来、仲基は、近代の側から近世に投げかけられるまなざしによって繰り返し再発見され、再生してきたのであるから。

そういった対称性、残された史料の少なさと、仲基をめぐる歴史記述の多さの対称性のうちに、著者は歴史記述の、就中思想史記述の方法論的問題を見出している。すなわち仲基をめぐるこれまでの記述は、仲基自身についてよりも、それを記述する歴史家のスタンスについてこそ、より饒舌に語っているのだ。それ故に仲基とは、それを記述する者がその方法論的立場を常に問われる、そういう対象なのだ。そういった意味において著者は、仲基に「思想史の前哨」を見る。したがって本書は、富永仲基をはじめとする懷徳堂周辺の知識人に関する思想史記述であると同時に、思想史を書くとはどういう作業であるのかといったラジカルな方法論的省察の試みでもあると言える。

本書の構成は、序およびあとがきと、次に示す四章よりなる。
第一章 反徂徠としての富永仲基——「論語徴駁説」を中心に

第二章 近世市井の歴史意識——『日本春秋』と『日本春秋書入鈔』

第三章 譬喩の言語学——富永仲基「三物五類」の説

第四章 あたりまえの誠の位相——「誠の道」と『中庸』の誠をめぐる

富永仲基という対象が、それを思想的に記述しようとする者の方法論的立場を常に問い返すような対象であるとは、主に二つの点においてであろう。第一には、史料制約が非常に大きいこと。著作群と伝記的事項の総合的理解により思想家の

思想的内実を復元する——というようなありきたりの方法では、仲基を思想的に記述することはできないのである。第二には、その限られた史料に肉付けするようにして歴史家たちが様々に仲基を語ってきたこと。それら歴史家たちのまなざしを通してでなく、仲基自身の同時代的文脈に即して仲基を記述するためには、仲基に対する自らの視点を方法論的に省察せねばならないのである。

本書において著者は、仲基個人ではなく、仲基が身を置いた市井の知的ネットワークを記述の対象とする方法論的視座をとっている。それは一つには、テツオ・ナジタ氏が『懷徳堂——一八世紀日本の徳の諸相』(岩波書店、一九九二)において示した視点を発展的に継承するものである。と同時に、第一章の題材となった『論語徴駁説』という特異なテキストとの出会いと相關的に成立したものであるだろう。

『論語徴駁説』とは、文字通り荻生徂徠の『論語徴』に対する論駁書で、元来の著者は井狩雪溪である。しかし現在懷徳堂蔵本として伝わる写本には、宇野明霞や仲基の注記、それに「或曰」と記された注記が本文中に収録されている。おそらくは稿本に付された頭注や付箋であったものが、書写の段階で本文中に組み込まれたものであらうと著者は見るが、同時に著者は、この『論語徴駁説』が書写され、読まれた場が、『論語徴』批判という共通の基盤をもつ、ある広がりをもった場であることをそこに読みとっている。テキスト単体の意味ではなく、その

テキストが読まれた場、そのテキストをテキストたらしめるコンテキストとしての思想空間をこそ、記述の対象とするのである。

仲基の残した著述は決して多くない。著者は第一章においてこの『論語徴駁説』の「或曰」なる一六三条の注記を、その内容や用語法等の共通性から、元来は仲基の注記であったものと推定し、それを論証している。すなわち新たな史料を発見したわけであるが、この発見は、仲基の史料が一六三条増えたという、いわば物理的な意義よりもはるかに大きいと評者は考えるというのは、本書を貫く著者の視座——仲基が身を置き、ある知的な基盤を共有していた同時代の知識人のネットワーク空間への注目は、頭注ないし付箋が本文として書写され、読まれていくというこの新史料の特異な性質と相關的に成立しえたものと評者は見るからである。それが故に本書は、仲基の新史料発見という、富永仲基研究史上の一大業績であるより以上に、これからの近世思想史研究が何を明らかにすべきかを鮮やかに示した点においてこそ、高く評価されるべきであるだろう。

さて、第一章では、本書全体のモチーフとも言うべき、仲基の拠つて立つ「あたりまえの理」が、徂徠の拠つて立つ「先王の道」にどのような批判的に向き合う形で成立したものであるかが示されている。仲基から見れば徂徠の論は、特権化された「先王の道」との関わりによってのみ正当性が証される、閉鎖的な議論でしかなかった。仲基は徂徠のそのようなあり方を「私

徴」と評する。それに対置さるべき「公徴」なるものを、開かれた議論の場において論の正当性がはかられる、いわば「公論」とも言うべきものとして仲基は提示するのである。仲基の「あたりまえの理」は、そのような「公論」の場において確立される知の普遍性を以て、徂徠の論に解体的に関わる中で提示されるのであり、その意味でそれは、懷徳堂周辺の反徂徠的ネットワークの所産であつたとも言える。

つづく第二章では、この「あたりまえの理」と徂徠学との緊張関係が、歴史意識における対立として描かれる。その際に題材として用いられるのは、仲基と僧日初によって構想され、仲基の死後、日初によって完成された通史『日本春秋』である。

このテキストは、従来はほとんど顧みられることのなかったものであつた。それは一つには、全体の著者たる日初が思想的には無名の人物であり、その伝記的事項もほとんど明らかでないことによる。そのいわば埋もれたテキストを掘り起こしたのは、知的ネットワークに注目する著者の方法的視座にはかならない。そもその構想を起こし、初期段階の共同作業を日初と行つたといえ、この『日本春秋』は仲基の著作とはいえないのであるが、仲基が他の市井の知識人たちと共有していたであろう歴史意識は、確実にそこにあるはずだからである。

加えてこの『日本春秋』には、上田秋成による批判書『日本春秋書入鈔』がある。大阪の市井の知識人ネットワークにおいてこの『日本春秋』は、秋成の『書入鈔』となかば一体となつ

て広く読まれたという側面があり、『日本春秋』と『書入鈔』を同じ地平の上で分析することで、そのようなネットワークにおいてどういった歴史意識が共有されていたかを明らかにすることが、ここでの著者の課題である。

まず著者は、仲基の『楽律考』を取り上げて、仲基と徂徠の歴史への態度を比較する。同時に朱子学的な歴史記述とも対比して、仲基らの歴史記述の態度が、徂徠との対抗関係の中で朱子学的なそれに一面で回帰しつつ、しかしどういった点で朱子学的歴史と異なっているのかを明らかにしている。徂徠の歴史が、史料の中に「先王の道」を見出してゆく解釈学的な記述であるのに対して、仲基のそれは史料によって適及的に過去から今への道筋を記述するものであつた。その点で朱子学の歴史と仲基のそれは共通している。しかし過去から今へ至る物事の移り変わりを「天理」というような形而上学的な原理で語る朱子学的歴史とは違って、仲基はあくまで人間の日常的な原理——「あたりまえの理」によって歴史を理解し記述しており、その点において、両者は明らかに相違するのである。

さて秋成の『書入鈔』であるが、これを一種の補助線とする形で著者の考察はさらに進められる。本書を貫くテーマである所の、反徂徠的契機のもとに成立した市井の公論空間——といったものが、ここでも描かれている。すなわち、歴史を、就中神代史をどういった視点で記述していくかについて、秋成と宣長の差異と、秋成と仲基・日初の差異とをそれぞれ明らかにす

ることで、秋成・仲基・日初が共有する歴史意識と、宣長の、ひいては古学派的なそれとの断層を浮き彫りにしてみせる。秋成が宣長を指弾するのは、仲基が徂徠に對してしたと同じく、ある理想化された古代との関わりによつてしか正当性が証されない議論の閉域を指してなのである。

著者はこの公論空間を、近世の歴史思想の展開過程と関わらせて、権力の側でなく百姓町人の側の視点で通史が書かれうるような思想空間の成立であると評価している。頼山陽『日本外史』にはじまり、明治に至つておびただしい作品を生みだす、在野の「史論」という領域がここにおいて切り開かれた、とも言えるだろう。

第一、二章は、仲基ら市井の知識人ネットワークで共有されていたある認識の地平を、仲基個人の著作でなく、仲基が共同作業的に関わつたテキストを題材として明らかにするものであつた。それに対して第三、四章は、仲基の名著『出定後語』『翁の文』を題材として、仲基の切り開いた認識の地平を明らかにするものとなつてゐる。ただし、ここにおいても、仲基と認識の地平を共有する市井の公論空間が一貫したテーマであることは言うまでもない。

第三章では『出定後語』を取り上げ、仲基のいわゆる「三物五類の説」を分析している。「三物五類の説」は「加上の説」とともに、内藤湖南をはじめとする東洋史学者たちにより、近代的思惟の先驅として高く評価されてきた。だが、そういった

評価の中で、「五類」なるものが何と何であるかが言及される時、なぜか決まつて、原テキストの文脈を曲げる形で「偏」が捨象され、代わりに『出定後語』末尾断章の「転」が取り上げられるという。言語の意味の遷移の型を定式化した「五類」のうち、「偏」とは「説の実」によるものである。近代の側からする評価は、これを原義そのままであることと理解して、「五類」の中から除いて論じてきたのであつた。著者はそこに、「説の実」を原義ととり、そこにある種の純粹性を見出そうとする古学派的発想を見る。すなわち彼らは、原初的なものを適及的に追求しようとする自らの近代的思惟に引きずられて、古学派と仲基とのあいだの差異を隠蔽する形で仲基を理解し評価してきたのである。

仲基にとっては、「五類」として定式化される様々な修辭作用によつて言語の意味が遷移することは、正当なる原義が失われるといったネガティブな事態ではなかつた。仲基の関心は、その言葉の意味を様々に遷移させる、言語行為の様態そのものであり、それ故仲基にとっては、もともとの意味も変化した意味も、言語行為として等価でありうる。そういった関心のもとにこそ「三物五類の説」は成立する。古学派的な、「古言」を規範的に捉える言語論から、様々な譬喩により意味が遷移する言語行為の様態を立体的に捉える「今言」の言語論への転回を、著者はここで明らかにしている。言語行為の様態と遷移を、時代の変遷や中国と日本の隔たりなどの外部的な歴史性に即して

理解するのが古学派だとすれば、仲基は、それを語用論の問題として、言語行為そのものの内部的な歴史性に即して理解しようとするのである。

徂徠学を批判的前提として成立する、仲基ら市井知識人の公論空間は、第二章においては歴史記述の態度の問題として論じられていた。すなわち被治者の側の視点から、日常的通俗な理に即して歴史を理解し記述する、史論空間の成立であると。

第三章ではその同じ事態が、言語論の文脈で論じられているとも言える。規範的な「古言」との関わりでもって言語行為が意味づけられるのではなく、互いに等価な様々な譬喩が、開かれた空間でせめぎ合う中で意味づけられていく——そういった空間として、仲基らの公論空間が位置づけられているのである。

第四章では、その公論空間のありようが、いわば道德論の側面から考察されている。仲基のいう「あたりまえの理」について、『翁の文』を素材として、特に「誠」に焦点をあてつつ、それが中井履軒ら懷徳堂の『中庸』解釈とどのような地平を共有していたかを明らかにしているのである。

仲基の「あたりまえの理」は、就中『翁の文』の「あたりまえ」なる誠の道は、仲基に「天才」を見出そうとする人々にとっては拍子抜けするような、文字通り「あたりまえ」な、通俗的な道德論の様相を呈している。近代の側からする評価が、ここにある種の失望を感じるのは、その「あたりまえ」なあり方が同時代において徂徠学的な「先王の道」との間に持っていた

先鋭な緊張関係を捨象しているからにはかならない。仲基が、「あたりまえ」なる通俗的な営みの中に誠を見出し、誠を誠たらしめる根拠をその「あたりまえ」なる人の判断力にゆだねたのは、徂徠の「先王の道」が「物」すなわち教えの条件としての先王の礼楽を人間の道德性の根拠であり指標であるとしたことへの批判としてであった。すなわち、「物」として外在化された人間の道德性を、再び内面へ、それも朱子学的な形而上学的理を用いずに、取り戻すものであったと言える。

仲基のこのような誠の論は、懷徳堂儒学の『中庸』解釈とある地平を共有しており、そこに反徂徠的ネットワークを基盤とした公論空間が成立している——と著者は見ている。本書では懷徳堂儒学の中でも中井履軒に焦点をあてて、その『中庸』解釈を仲基の誠の論と重ね合わせる作業がなされている。

『中庸』とその著者子思は、徂徠によって、老子との対抗関係の中で本来の道をねじ曲げたものとして貶められた。特に『中庸』が「誠」を主題化したことなどは、子思による歪曲の甚だしきものとして、徂徠は盛んに批判する。しかし、孔子の道を「誠」に焦点を当てて新たに捉えなおしたということとは、履軒にとってはむしろ子思とその『中庸』の価値そのものであった。古代的なもの、原型的なものを規範として捉えず、むしろその内的な歴史性、繰り返される遷移の多様性をこそ重要視するという点で、仲基と履軒は同じ地平に立っているのである。

古学派のものの、直接には徂徠学的なものを批判的前提とすることは、しばしばその表面において、朱子学への回帰に似た様相を呈することになる。仲基らの反徂徠的ネットワークが単なる朱子学への回帰ではないことは、著者が本書を通じて繰り返し論証してきたことである。著者がこの点にこだわるのは、いわゆる「徂徠以後」と呼ばれる一八一九世紀の思想空間が、丸山眞男以降ずっと、徂徠学への反動・朱子学への不徹底な回帰として、徂徠・宣長という思想史上のメインストリームに対する従属的な位置しか与えられて来なかったからにほかならない。反動的な徂徠亜種でも、朱子学への先祖帰りでもなく、徂徠学的な世界を認識論的に解体しうる新たな地平がそこにはあったのだ——そのことを著者は明らかにしており、その意味で一八世紀以降の思想史に対する捉え方を根幹から見直す必要がある。本書によって生じたと言える。この第四章では、古学派によっていったん葬り去られた「理」なるものを、履軒がいかに再編成していったかが述べられている。履軒において「理」は、天道と人道の切断を前提として、天の「物理」と人の「人性」とをそれぞれ異なる言語で解き明かすような新たな「窮理」へと展開していく。山片蟠桃に代表されるような、懷徳堂のある種の教養主義は、この「理」の再編成によって成立しているのである。そしてそれはまた、正当性や妥当性の判断の基準を形而上学的でない形で人間の内面に取り戻そうとした仲基の「あたりのまへの理」と相通ずる事態であった。

以上の著者の論旨をふまえ、最後に評者の私見を二、三述べて、むすびとしたい。日本の一八、一九世紀の思想史においては、知の拡散とも言うべき事態が顕著に見られる。すなわち豪農商層ら富裕な階層の中から読書人的な人々が多く登場し、近世前期までの特殊知識人的なあり方とは違った形で知が共有され流通していく状況があったのである。都市においては彼らはしばしば会合を持ち、情報を共有し交換したし、地方においては都市との頻繁な書簡往来をもってそれに代えた。こういった知の広がりには、学派学統的な整理では捉えきれない。丸山の思想史理解が無価値として捨象したこの広大な裾野は、近世的な知のあり方の特徴づけるものであり、その意味で重要な意味を持つが、研究史的蓄積は甚だ少ない。いわゆる在村知識人に関する地道な研究成果は蓄積されてはいる。本書の前提となった、山中浩之氏や小堀一正氏の研究もまた、その方面の大きな成果である。

本書は、そういった蓄積をふまえつつ、一八世紀における知の拡散を、市井知識人のネットワーク的結合による公論空間の成立として描き出している。知の広がりを学派的カテゴリーで寸断するのではなく、また茫漠たる広がりをのべたらに描くのではなく、そこで何が共有されていたのかを明らかにした点で、高く評価されよう。

こういった知の広がりは、直截に近代と結びつけるべきものであるよりは、近世的知のあり方の一つとして捉えるべきものである。

であると評者は考えるが、その点についての本書の立場はあまり明確とは言えない。それが明確に示されるべきであると評者が危惧するのは、奇しくも同じ「公論」という用語のもとに、宮地正人氏が幕末における近代的ネーションの萌芽的成立を論じているからである。近世的知のあり方を明らかにすることは、問題意識のレベルにおいては常に、自らの拠って立つ近代なるものに批判的に関わることである。しかし叙述のレベルにおいては、近代との関わらせ方は、あたら限りデリケートになされねばならない。近世的知の広がりを一足飛びに近代に結びつける類の議論といかに差異化しつつ論を立てるか——これは評者自身の課題であるが——そういった問題も含め、本書をふまえた活発な議論が今後行われることを期待したい。

〔付記〕本稿は日本学術振興会の研究助成および文部省科学技術研究費補助金（特別研究員奨励金）による研究成果の一部である。

（日本学術振興会特別研究員）

桂島宣弘著

『思想史の十九世紀——「他者」としての徳川日本』

（ぺりかん社・一九九九年）

見城 悌治

戦後歴史学の研究史を繙いてみると、方法論をめぐる侃々諤々の議論が、学問自体の「活性」に大いなる意味を持つてきたことは、今さら言うまでもないが、とりわけ、戦後思想史研究の分野においては、より自覚的な形で展開を見てきたことは、大方の同意を得ることができるであろう。それは、日本近代社会を支配してきた「皇国史観」的封建的思維構造をいかに批判、克服していくかという課題意識がその出発点となるのだが、その先導者となった丸山真男氏が戦中の論考を含んだ思想史論集『日本政治思想史研究』を単著として世に問うたのは、一九五二年のことであった。以降、「近代主義的」と呼ばれたその手法の継承深化を目指す諸論、またそれを正面から批判し、新境地を開拓していく諸論が陸続として誕生してきたものの、今日に至ってさえも、その影響力が完全に払拭されたわけではない。

戦後の思想史研究において、丸山史学批判の一つの中心になっていたのが、安丸良夫氏らを代表的論者とした「民衆思想